# 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

（１） 名　　前：Abdurrahman Mohammad Fachir
（アブドゥルラフマン・モハマッド・ファヒル）（インドネシア）
（２） 年　　齢：68 歳
（３） 参加事業：第５回「東南アジア青年の船」事業 参加青年（1978 年度）
（４） 職　　業：インドネシア政府 元外務副大臣

2018 年に、シンガポールの既参加青年で作成した「東南アジア青年の船」事業（以下「東ア船」という。）記念文集の中で、私の寄稿には『It changes My (Our) Life』（私の／私たちの人生を変えた事業）というタイトルをつけました。なぜなら、インドネシアカリマンタン州の村、カンポンの学生であった私にとって、東ア船に参加するインドネシア青年代表として選出されることは、まさに夢であり、私の人生を変える経験となったからです。

## ■参加のきっかけ

インドネシアには当時 27 州あり、州ごとに 1 名もしくは 2 名が選出されることになっていました。ちょうど空席ができ、補欠を埋めるために、インドネシア政府の依頼で事後活動組織が追加選考に協力していました。私は既参加青年に勧められ、この事業選考に挑戦しました。

東ア船は私にとって**初めての海外経験**であり、ASEAN4 か国と日本の若き大使（代表者）たちと濃密な交流をする絶好の機会でもありました。日本人にも事業参加前に 1、2 度会ったことがあったかもしれませんが、本格的に交流するのは初めてでした。

## ■キャリアパスやスキル向上に役立ったこと

にっぽん丸での生活経験は、異なる文化や伝統を持つ新しい環境に適応し、友人を作り、相互理解を深める方法を教えてくれました。**視野が広がり、寛容さと尊敬の念**を持つことができました。このことは、私の外交任務の目標達成に大きく貢献しました。

### 東ア船事業の特徴はどんな所にありますか。

東ア船のどの部分が具体的に役立ったかと聞かれたら、全てと言えますが、**実際に「学ぶ」だけではなく「実践する」「行動に移す」ことができるところ**だと思います。宗教や言葉が異なる環境において、**相手に尊敬の念を示す、寛容の心を持つ、と言った高尚な価値観を養うことができました。**ホームステイの体験でもそうでした。あるファミリーの元では、英語が通じませんでしたが、歌を一緒に歌って仲よくなったのです。

もちろん船内活動でも、寛容さを実践する場がありました。他の参加青年が違う価値観・考え方を提供してくれることは、貴重な経験でありました。そして私が立ち上げた活動の一つに、ムスリム教徒のための「金曜日の礼拝」があります。

ムスリム教徒は金曜日にお祈りをするのですが、私は、夜間にはダンスパーティーもできるようなホールで礼拝をできるように、マレーシアやシンガポールの青年と一緒に企画をしました。また、インドネシアの年中行事である「犠牲祭」（ハッジ）をお祝いするための演劇をした際には、ムスリム教徒でない青年もこの演劇に協力してくれ、役を演じるなどしてくれました。これが「寛容」の精神であり、人生の「新しい体験」でした。私が立ち上げた活動は、翌年以降も継続したと聞いていますが、発案する、仲間を見つけて提案する、実施するという一連の活動はとても有意義でした。

船の中では、自らを学習者として、時にはチームの一員として、管理者、監督者、プロジェクト・オフィサーとして、一定のルールを守りながら活動するのです。家族といれば、親に頼ったりしてしまうこともあるでしょう。**船の上では、個人として自立する必要があります**。用意されているプログラムもあれば、自分たちで企画するものもあり、双方に創造性や教育の要素があり、他の参加青年を**巻き込む、リードするという体験や、フォロワーとして受け入れること、柔軟性を持つこと**は大切です。

### 船事業を行う意義について、どう思いますか。

船というボーダーレスな共同体の中では、参加青年同士の絆が通常よりも凝縮して強くなり、「家族」とも思えるような結びつきとなります。もちろん**個の違いは尊重され、自分の持っているものを共有し、相手側との架け橋になりソリューションに導く**。これは**外交にも応用できる、非常に大切な要素**です。

### 事業への参加がその後の人生に与えた影響は何ですか。

外交官になろうと決心したことです。東ア船に参加したことで、大きな目標ができたのです。1983 年 10 月にちょうど、インドネシア外務省で新しい職員を募集していることを知り、私はすぐさま応募しました。数々の試験を受け、そして晴れて外交官になったのです。私の後輩の中にも、外交官や国際関係の学者を職業に選んだ人が何人かいます。

## ■外交官としての実績

初めに、東ア船の目的と価値は、「自由、恒久平和、社会正義に基づく世界秩序の実現に貢献する」というインドネシア憲法上の使命を理解、実践する上で、インドネシアの外交政策に非常に関連していることを強調したいと思います。

私がニューヨークの国連インドネシア政府代表部で勤務していた時、私たちは自らを、「相互理解の促進や国際協力・連携の強化のための解決策や橋渡し役」として位置づけていました。インドネシアが非同盟運動の議長を務めていたため、非同盟調整局の仕事をするよう言われ、私はこのアプローチを強く感じました。メンバー国間の共通の見解をまとめるだけでなく、他のグループの国々とのコミュニケーションを図り、共通の基盤と Win-Win の結果を見出すことにも力を注ぎました。

友情とは、お互いにメリットを与え合うことでもあります。国際協力の世界において、経済協力をする際、相互にメリット（利益）を与え合うことが大事です。協力の度合いが強まるほど、絆も深まり、近しくなります。利益は「数値化」できるということが大切です。そして私はどんな国際会合でも、「私たちの良好な関係と可能性を見れば、もっと大きなことができる」と主張しています。

国連で 200 ほどの国が集まった時、1 つの結論で全ての国を満足させられるということはありません。気候変動やサステナブルな開発等の分野においては、たった 1 語を入れる、入れないで揉めることもあるでしょう。いくつもの視点があり、それぞれが国を背負って戦っているなかで、**どうしたら自分が解決の一部となることができるか、橋渡し役になれるか、Win-Win フォーミュラは何か**を考えます。そしてこれは人間の性質でもありますが、「全てを得ることは難しい」と同時に、少しずつ譲歩して、納得いく結論に導くことで、「お互いの利益」を作ることもできます。これは**全て、東ア船から学んだこと**です。

**具体的かつ数字で示せる協力にはどんなものがありましたか。**

マレーシアでは、着任時、200 万人以上のインドネシア国民（そのほとんどが移民労働者）保護のため、領事館でのサービス提供に注力しました。私たちは、手作業で 4 週間かかる作業を、デジタルに移行し、3 時間でできるよう変更することで、パスポートをはじめとする書類処理の期間の短縮に成功しました。

エジプトでは、2 つの主要ミッションに注力しました。一つはアル・アズハル大学に通う何千人ものインドネシア人学生の暮らしと学業の成功、そして二国間の経済協力の強化です。

エジプト着任時、インドネシア人学生の半数以上が学業継続できていない事実を知り、大変残念に思ったと同時に、その状況を変えたいと思いました。私たちの広範囲の努力が実を結び、予定通りに学業を終えたインドネシア人学生の数が 49%から 78%に増え、アル・アズハル大学のキャンパス内に 4 つの寮を建設することができました。

また、インドネシアの対エジプト投資 3 案件により、2 年間のうちに貿易額を 5 億 6 千万米ドルから 12 億ドルに増やすことに成功しました。5 億 6 千万米ドルという当初の金額は、インドネシアが持ちうる可能性からはほど遠く低い金額でした。私は多くのインドネシアおよび国外のステークホルダーを動員し、結果につなげることができました。良好な関係は、見える化していくことが重要です。

私がインドネシア政府情報・広報総局長の役職にあった時の私の主な関心事は、インドネシアを民主的で多様性に富み、安定し、貢献する国としてアピールすること、そのためにより多くの関係者を巻き込み、力を与えていくことでした。「バリ・デモクラシー・フォーラム」「宗教間・文化間ダイアローグ」、「インドネシア芸術・文化奨学金」などの活動に、より多くの国家レベルの人物、公人、学識経験者、宗教指導者、若者の参加を呼びかけました。これらのイベントは、今でも多くの参加者を集め続けています。一方、中所得の発展途上国であるインドネシアは、開発援助の単なる受領・受益者にとどまらず、提供者、開発パートナーへと変容し始めています。日本の JICA と同様に、「インドネシア・エイド」は、援助を提供する組織として設立され、政府機関と非政府機関の双方を動員し、他の発展途上国に卓越性を持って専門知識を共有しています。

最後に、外務副大臣として大臣をはじめとする高官の支援に従事していた際には、外交機構（体制）の能力強化を掲げ、全てのビジネスプロセスのデジタル化と情報システムの統合に注力しました。これには態度、考え方、さらに企業文化の変革を必要とするため、簡単なことではありませんでした。同時に、外務省は調整役としての役割も強化しました。それは、組織のほとんどや個人が国際関係や協力に携わっているためです。外交官は、技術系の省庁や州政府にも在籍し、諸外国のパートナーとのやり取りを支援します。よって外交官は、国際規範の策定を審議するという従来の役割に加え、国内のアクター（活動家）が海外のカウンターパートと互恵的な協力関係を築くための扉を開き、道を拓き、奨励、促進する役割が求められるようになったのです。

私は多くの機会に、特に年次計画と予算の審議の際に、仲間である外交官、特に在外公館の外交官らに、「私たちの資源は主として、良好な関係を具体的で測定可能な協力に結びつけるために割り当てられている」と念を押してきました。結局のところ、在外公館が存在するということだけで、すでに良好な関係は示されているのですから、外交官には、国際協力の成果を具体的かつ数字で示すことが求められるとの考えを伝えるように心がけています。

## ■事業へのコメント、参加後の国際的・地域的な人的交流

### 事業に対する課題等があればお聞かせください。

私が一つお伝えしたいのは、事後活動（事後活動組織）の価値です。東ア船は参加した時のみならず、その後のキャリア形成、ネットワーキングに大変役立っています。

東ア船事後活動組織がすべきことの一つに、**参加青年のデータ管理**があります。グローバル化した世界において、関係構築、交流、パートナーシップ、協力の可能性は広がり続けています。既参加青年が勉強を続けたい、ビジネスをしたい、その他の目的において、日本と ASEAN、そして世界へと、更にネットワークを活用すべきです。

私の同期でフィリピン参加青年の Jun Dilem は駐インドネシアフィリピン大使館に派遣され、ジャカルタの副代表を務めたこともあります。私は彼のジャカルタでのミッションの多くのサポートをしました。事業を通じて既にお互いを知っていたので、協力し成功に導くということが容易に出来ました。Dilem は現在駐ブラジルフィリピン大使館にいます。もし連絡が取れなくなっても、事後活動組織で参照することができます。既参加青年には知事、大臣、統括官、ビジネスマンが多くおり、他の参加年度、参加国であっても一緒にビジネスをすることもできます。

今はデータの時代であり、人と人をつなげるのはデータです。データをツールとして活用することで、事業参加後の、人的資源の動員や、異なるプロフェッショナルたち活躍に役立つと考えます。

関係性を築くには、顔を合わせたコミュニケーションが大切あるため、東ア船事業もフェイス・トゥ・フェイスで実施する必要があります。**実際に会うことで、もたらされる感情や感覚は異なります**。

東ア船も、成果を数量化して見せていくことは、一つのポイントとなるでしょう。

### 参加後の日本との関わりや人的交流について教えてください。

日本には、業務及びプライベートの両方の機会で再訪しました。私は日本のカウンターパートと仕事をする際にはいつも、「私はハーフ・ジャパニーズです」と冗談を言います。それがコミュニケーションのよいアイスブレークになっています。私は東ア船参加により人生が変わった人間なので、そのくらい**日本に影響を受けているということも事実**です。

東ア船が私の個人として、そしてプロフェッショナルとして人生に大きな影響を与えたことに感謝を述べたいと思います。東ア船は、私の世界に対する視野を広げ、慎重に行動したり交流したりする方法を教えてくれた、「目からウロコ」の出来事でした。そして人格形成のための訓練とも呼べる出来事でした。

東ア船は、世界で最も歴史のある青年交流事業の一つです。そのため、明確な目的ともたらされるもののために事業継続に当たる日本政府のコミットメントには大いなる経緯を評します。

私は、日本の政府関係者、友人、カウンターパートやパートナー、さらには個人の方までも、お会いするかた全てに、このことを伝え感謝を述べています。

日本の貢献と東ア船こそ、私たち参加青年が誇りに思うことなのです。

## 将来の参加青年に対して、メッセージをお願いします。

東ア船に参加したチャンスを最大限に生かしてください。また、東ア船に参加したメンバーとの友情を継続するよう心がけてください。事後活動組織は時々リユニオンを開いており、お互いに学び合い、さまざまな経験から仕事とプライベートの両方で恩恵を受けることができます。

### アブドゥルラフマン・モハマッド・ファヒル氏（Ph. D）のプロフィール

PT Freeport Indonesia 委員、インドネシア赤十字国際部理事。元インドネシア外務副大臣。State Institute for Islamic Studies (IAIN) Jakarta にて修士課程卒業後、1985 年インドネシア外務省入省。駐マレーシア首席公使（2004～06 年）、駐エジプト特命全権大使（2007～10 年）、駐サウディアラビア特命全権大使（2014 年）、外務副大臣（2014～19 年）を歴任。2002 年、メガワティ・スカルノプトリ大統領の公式通訳を務めるなど、語学に堪能。2020 年、Bintang Jasa Utama（主従軍星章）を受賞。2015 年、インドネシアの国立大学であるガジャ・マダ大学で宗教・異文化学博士号を取得。